

## 東河古鎮①

麗江から北へ4 km 程離れた所に東河という古い町がある。麗江の一部とみなされているのか通常の地図には載っていない。しかしここはナシ族が南下移住した最初の集落の一つであり、古くは毛皮貿易の中心地として、そして茶葉の集積、荷役中継地として繁栄した所である。しかも麗江に土司として王府を築いた木氏発祥の地といわれている。往時は絶え間なく荷馬隊が行き来し、馬鍋頭（隊商の親方）の住居や馬店（荷馬商隊の宿）があり賑わっていたといわれている。

資料によると SHU HE はナシ語で「峰のふもと」を意味しているそうだ。東河はそれに当てた漢字だという。玉龍雪山に近い。この地を表すのに「一つの雪山、二つの溪溧（淵）、三つの水路」という言葉がある。湧水が湧き、川があり、それを利用した疎水が街に幾本も流れている。玉龍雪山のふもと2440mの高地にナシ族、漢族、チベット族、白族が約1000戸、3000人が居住しているとある。



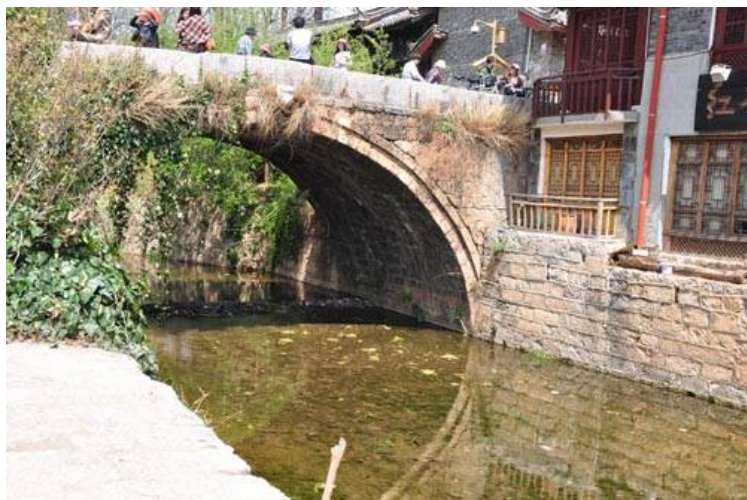
東河古鎮の入り口門。

思っていたより大きく豪華である。麗江の原点にあたる町なのだから当然かもしれない。

もちろん麗江の世界遺産に組み入れられている。

麗江が観光地化してしまったいま、周囲の自然と往時の生活ぶりが偲ばれる麗江観光に欠かせない場所として、脚光を浴びているとガイドが言っていた。

## 青龍橋



駐車場から川（青龍川）沿いに少し歩いた所に石橋がある。清流に掛かるアーチ状の石橋、樹の緑に反り屋根の建物といかにも中国の田舎町の

風情が目に入る。

青龍橋は400年前の明王朝に建造されたもので、麗江地域で最大の石橋（長さ25m、幅4.5m、高さ4m）と言われている。この橋を境にして上と下に（私が勝手に名付けている）街が二分されている。上と下では街の性格が違っている様だ。まず橋の上に立って、周囲を眺めて方向を定める。見晴らしが良いので方向を定めるのに絶好の場所になっていた。町自体それ程広くないので何度かこの橋を通り、別な方向に向かっていた。



## 橋からの眺め



橋から川の下流方向に向かって左手（上の街）と右手（下の街）である。上の方は商店や食堂が並んでいる。この写真はそれらの裏になっている。下の方は少し低くなっていて、田園風景が見えている。右の写真の左に駐車している車があるが、その付近が駐車場になっている。右の山をたどっていくと



タルチョー（経典を印刷した旗）を結び付けた綱が張り巡らされている。チベット仏教寺院がそこにある。

上流の方にも家が建ち並び、中州みたいな場所に畑がある。その向こうに雲の上に白い頂が見えた。玉龍雪山だろう。



麗江の古城区のように、建物がひしめき合っている所と違って、まだ素朴な農村の町の感じがする。

前頁の石橋の上から見た方向は下の街の道である。下って山の手前まで家屋が並んでいる。下の写真は逆の上の街の方向を写したものだ。

丁度、民族衣装を着た女性が写真を撮ってもらっていた。撮っているのはプロのカメラマン達で、白族の衣装を着ている女性は貸衣装から借りて着ている観光客である。記念にアルバムを作るのが若い観光客に流行している。中には本格的なモデル撮影の様に反射板を使っているグループも見かけた。



## 上の街 (小さな麗江)

橋から少し先に歩いた場所に四方街がある。麗江に比べるときわめて小さい。写真の左側が四方街の広場になっている。そこから街路が東西南北に通じているのは麗江と同じだ。むしろここがナシ族の町作りの原型といえる。

ここでは馬に乗っての観光が若者や家族連れに人気ようだ。よく見かける。



通りには麗江と同じく土産品売り場や食堂、カフェが並んでいる。また麗江と違って一軒一軒がこじんまりしているし樹の緑が多いので親しみがもてる。馬の列が観光客を乗せて通るので、馬の落とし物に気を付けながら歩いていたら、それを除いている人がいた。

見ていないが情報によれば深夜か早朝に二箇所の湧水を溢れさせて街中を洗い流すのだそうだ。その為か街中はきれいに清掃されている。



水の流れと柳の樹が多い。江南でも旅行している気分さえする居心地の良い街である。

左下の旗に「広州人家・客棧」とある。



客棧は宿屋、民宿といった所だ。昔から旅人を泊めていたのだろう。麗江にもあったが、東河の方が数も多いし、規模が小さく趣がある。これから何度か写真に出てくる。次に訪れる時にはこういった場所に泊まって、ゆっくり散歩してみたい。そんな街である。